

社会 高齢化に拍車をかける 過去最低の出生率

子供を生まない女性が増えたといわれて久しい昨今。このほど、厚生省がおこなった人口動態統計によると、昨年の出生率は、120万8977人で、対前年比増となった一昨年を1万4268人減少した。これは、明治32年に統計を取り始めて以来、最低の数字。また、2:1以上ないと人口は増えないといわれている合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子供の数）も過去最低の1.50となり、いよいよ本格的な高齢化社会への対策が必要となってきた。出生率低下の直接的な原因として考えられるのは、女性の社会進出による意識の変化が第一であろう。キャリア志向の女性の増加による晩婚化や、一頃もてはやされた子供をつくらず、共働きを続けるデインクス夫婦が新しいライフスタイルとして定着していることが考えられる。また、間接的な原因としては、既婚女性の半数が就労している現状から、仕事と子育ての両立の難しさなどが挙げられる。育児休業法が施行され、夫も妻も休暇が取れるようになったものの、保育施設の不足や預かり時間の問題等が残る。このため、企業内での保育所も整備されつつあるが、子供を連れての通勤を考えるとスムーズには行かない。このように、産まないのではなく、産めないという社会事情の影響も大きい。

出生率が低下し、人口が高齢化すれば、若い世代が負担しなければいけない、年金保険料の問題。そして、労働力不足で経済全体の低下などが懸念される。しかし、また一方で、子供たちにとって受験戦争が緩和され、住宅事情などにもゆとりがでてくるのではないかと楽観論もある。いずれにしても人口問題が社会に与える影響は大きい。まして、問題内容がごく個人的なことだけに、今後の確な対処策をみつけるのはなかなか難しいだろう。

スポーツ タイソンVS前田日明 夢の対決にゴング!

ロシア、オランダ、ブルガリア、ゲルジアなどグローバルなネットワーク展開で他団体をリードしてきたプロレス団体組織、リングス。そのリングス代表の前田日明とアメリカが生んだ史上最年少の元ヘビー級チャンピオン、マイク・タイソンとの異種格闘技戦が行われるとのウワサが流れている。去る6月に、前田日明がリングスUSA設立のため視察渡米した際、かねてからタイソン戦を熱望する前田が、タイソン、そしてそのプロモーターであるドン・キング氏と会談を行ったというのがそもそもの発端である。すでに、テレビ局をはじめ各関係者の協力も約束されており、この会談の成功いかんによって対戦実現の可能性は、非常に

高くなるというわけだ。しかし、まだまだ、問題は多い。まず、一つにレスラーとボクサーの格闘技戦となると、何よりルール設定の問題が生じてくる。今からおよそ20年近くも前の話になってしまった、アントニオ猪木対モハメッド・アリ戦で揉めに揉めた末、プロレス技の大部分が禁止され、試合形式も1ラウンド3分間で15ラウンドのボクシングスタイルで行われたほど。そのどうも噛み合わないルールが、勝負の緊迫感を半減しているような観感もある。そして、このタイソン戦に限っての問題であり、最大の難所であるのが、マイク・タイソンの身柄。知つてのとおり、現在、タイソンは、2年前の女子大生レイプ事件で6年間の実刑判決を受け、服役中。前田はタイソンの有罪が決定して以降「タイソン保釈嘆願署名運動」を続けているなどし、リング復帰に向けて奔走しているが、今のタイソンは、早期釈放の望みも消え、最新情報では、看守の命令に背いたとして懲罰房に移され、さらに服役期間が30日延長されてしまったと聞く。

リングを遠ざけ、2年あまりが過ぎようとしているタイソン。しかし、あの野生のようなフアイト、驚異的な強さは世界中の人間の胸にいまどくつきりと焼きついている。かたや前田も、たった一人で団体の旗揚げをし、日本のプロレス界に新風を巻き起こした、今や「格闘王」と呼ばれる男。この両者の闘いが実現すれば、今世紀最大のビ

ックマッチとなることはいうまでもない。一日でも早く試合開始のゴングが鳴らされる日が来ることを願わずにはいられないのだ。

政治 政界再編に関する 国民の意識調査



政治改革の行方と並んで、今、国民から最も注目されている政界再編。読売新聞社では、去る5月22・23日の2日間、わたり、政界再編と今秋おこなわれる「自民党総裁選」に関する国民の

意識調査をおこなった。

結果、政界再編に関心を寄せていると答えた国民は、「大いに」と「多少」との回答を合わせて、半数を超える57%。また、再編は望ましいかとの問いには68%が「望ましい」と答え、国民の政界再編への関心が極めて高いことが明らかとなった。

しかし、その反面、具体的な問題、実現すると思うかどうかの質問では、57%が「実現すると思わない」と答えている。望むとした人の一番の理由が「政治への信頼回復」と答えていることから、国民がいかに今の政治家に不信感を募らせているかということがうかがい知ることが出来る。

ここ最近、問題になってきた選挙制度改革問題を例にとっても、政治家たちは国民のためのより良い案を出すために議論するのではなく、いつまでたっても政治家個人の利害や立場に帰着しがちな傾向が消えない。そんな政界を信用しろ、期待しろという方がどだい

無理な話なのだ。今、政界再編を進めるに必要なのは、口先だけの議論ではなく、実力を持ち、私利私欲を捨てた政治家の出現である。それは、今回の調査の中で、今の時代の首相に必要な資質として特に重要だと思ふものはという質問に対し、1位が実行力(54%)、2位が指導力(51%)、3位が国際感覚(45%)という結果がでてきていることも

も明かである。ちなみに、宮沢首相の総辞職の是非については、「続ける方がよい」がわずかに14%、これに対し「交代する方がよい」が78%となっている。かつての海部首相が、総辞職46%、交代派43%だったのに比べると、宮沢首相の不人気ぶりが目立つ結果となった。さらに、宮沢首相に代わる次期首相は誰がふさわしいかには、1位が橋本龍太郎(11.2%)、2位が石原慎太郎(10.9%)、3位が海部俊樹(6.0%)とのこと。しかし、次期首相候補でさえ、11.2%の支持しか集めていないというのは、

今後の政界の行く末を暗示するようであるとも悲しい数字である。

海外政治 人気下落速度は過去最高 もはや妻は妻の「ワウ」

発足間もないクリントン政権が、早くも危機に直面している。発足時には60%を超えていた大統領支持率も、5月の時点で、政権発足直後としては未曽有の35%にまで下落。歴代政権の中でも最低レベルまでに落ち込み、評判はガタ落ちの一途を辿っている。

その要因として、外交問題の不手際や大統領周辺の小さなスキヤンダルが影響していることはいうまでもないが、決定打はやはり経済政策だろう。財政赤字削減を目的に、4年間に2420億ドルという史上最大の増税を見込んだ大型増税案を採り入れた経済再建は、共和党だけではなく身内である民主

主党議員の中からも批判の声が出ている。この増税案を含む財政調整法は、結果として5月末の連邦下院で可決はされたが、その内容は民主系下院議員30人以上が法案反対にまわり、わずか4票の優差でなんとか通過できたというもの。このことから、いかに、党内に反クリントン派が多いかということがわかる。

身内からの造反にあう大統領だが、そもそもこの失敗の原因は、再編期を迎えて浮き足立つ中で、国民の遊説を専らにし、議会中心のワシントンの既存の政治的枠組みを軽視したためであろう。さらに、改革を最大の謳い文句としてきたクリントン政権が、新時代に即応できる外交原則なり方針を持っていないのかどうか、国民をはじめ、対外に伝わってこないということも信用を下落させる大きな要因であり、無能と評される所以ではないか。

そんな不人気政権の中、大統領の権威失墜を尻目に脚光を浴び始めたのが、

意外にもあのヒラリー・クリントンだ。歴代政権ではどうにも手がつけられなかった最重要課題であり、その成否は政権の将来を左右するといわれる難題、医療保険制度改革に果敢に取り組み姿に、でしゃばりたか陰口を叩きつつも、国民は大きな期待を寄せている。現にマスコミでは、「最近の歴史で最も議論の多い、最も権力を握るフアーストレディ」とヒラリー夫人を評している。

変化を最大の売り物にして大統領の座を勝ち取ったものの、いまだ変化の報酬が何であるかを示すことができないクリントン。しかし、このヒラリー夫人の存在が、良妻賢母であるべきとされてきたフアーストレディ像、そしてアメリカの女性観に少しずつ変化をもたらしつつあることは確かだ。妻の尻にしかかかっているとの観はともかく、クリントン政権になつての唯一の変化である。これも改革者としての実力!?

の二つとみなすべきなのであろうか。



ひなたのとぐろまき① 霊長目・ヒト科・おちよけ類



杉本ひなた

どんなにお堅い職業の人であろうが、おちよけさんは必ずいるものだ。そもそもこの「おちよけ」とは、しょうもないこと言いである。つまり、湯才ならボケ。「えー加減にせえよ」のネタを振り、オーバーリアクションで大ボケをかます。かくいう私もおちよけな部類だが、行きつけのスナックには、超とぐろまきのおちよけさんが現れる。「川ちゃん」と呼ばれる一匹狼。その筋の人には珍しく、彼は店のカオスのようだ。よく見ると、色白のブッシュメマンといった愛嬌のあるコワモチをして

いる。確か、今年で45歳のはず……顔見知りになって6年になるが、一向に歳を取ってる気配がない(赤ちゃんのときから同んなじ顔してたんやないかと、時々そら恐ろしくなる)。金えば人なつつこく話しかけてくるし、「仕事で鍛えた鼻や」言うて、両穴に五百円硬貨をつめたりなんかしてくるわけだ。そうそう、彼は中国人である。この間、中国名を教えられた。

——金玉大
親もおちよけやったに違いない。正式には「キンギョクダイ」という由緒正しき(?)名前なのだろう。
そして、昨夜も運よく相席するハメにあり、案の定ちよっかい出してきた。
「おい、お前、血液型、何や?」
「ガタガタのクワガタ!」
「しようもな、ワシはヒシガタや!」
「……(はいはい)」
「はな、星座は?」
「アタシ、ぎょうざ!」
「やるのー、ワシ、やくざや!」
「……(まんまやないけ)」
はあ、面倒見きれんわ。京都動物園の「人間の檻」にでも入って下さい。